

会議録（要旨）

件 名	令和6年度 第1回亀岡市総合教育会議		
日 時	令和6年6月7日（金）	報告者	企画調整課 横山 智鶴
	午前9時～11時10分	場 所	市役所6階 602・603会議室
出席委員	10人 桂川市長／石野副市長／佐々木副市長／ 神先教育長／北村教育長職務代理者／末永委員／出藏委員／ 秋山委員／松浦委員／野々村委員		
欠席委員			
事務局 出席者	17名 森岡教育部長／川口教育部次長兼総括指導主事／松野教育総務課長／今 西学校教育課長／黒田学校教育課教育支援担当課長兼学校教育課指導主 事／土川社会教育課長／宮本社会教育課人権教育担当課長兼社会教育係 長事務取扱／岩崎学校給食センター所長／小川図書館長／片山みらい教 育リサーチセンター所長／山内みらい教育リサーチセンター副所長／榎 本教育総務課総務係長／ 垣見市長公室長／岸秘書課長／ 山本政策企画部長／山口企画調整課長／横山企画調整課企画経営係長		
傍聴者数	0名		

1 開 会（山口企画調整課長 進行）

2 市長あいさつ

3 協議事項「教育施策の重点事項」について

（1）スタディアブロードプログラムに係る市内学校での受入れについて（資料
1）

市長（説明要旨）

スタディアブロードプログラムに係る市内学校での受け入れについて、今年
の10月19日から10月26日まで7泊8日で、アメリカのスティルウォー
ター市の中学生7名と、教員3名、姉妹都市委員会から5名が来られる。もしか

したら市長も来られるかもしれない。

大成中学校が姉妹都市交流35周年を祝いたいと希望していることから、基本的には大成中学校を中心に交流を進めていき、亀岡の体験をして欲しい。

滞在期間が10月26日までのため、25日の亀岡祭やサンガの試合があればスタジアムで試合観戦をしたり、保津川下りも体験して欲しいと考えている。

具体的な内容については、秘書課と学校教育課から説明をお願いしたい。

秘書課長

昨年度のプログラムについては、亀岡市立中学校・義務教育学校の生徒がスティルウォーター市を訪問した。

現地滞在は、令和5年10月29日から11月4日までの7日間、各校より1名で、2年生4名、3年生3名の7名が参加した。

訪問団長は神先教育長が務め、スティルウォーター市およびスティルウォーターミドルスクールには、素晴らしい受入れプログラムを作ってもらった。

現地ではホームステイやミドルスクールでの授業参加、交流、市内視察、ハロウィン、バーベキュー、アメフト観戦等の文化体験を行い、大変充実した時間を過ごしたと聞いている。

今年度の受入れについて、受入期間は10月19日から10月26日までの8日間で、スティルウォーターミドルスクールの中学生7名、男子4名、女子3名、あと随行者の先生3名が亀岡市に来られ、中学生7名は市内の中学生の家庭にホームステイする予定である。

スティルウォーターミドルスクールから、大成中学校との姉妹都市交流35周年をぜひ祝いたいという強い希望があるので、大成中学校に受入れをお願いし、現在調整を進めている。

内容については、後ほど学校教育課が説明する。

文化体験として、保津川下りと亀岡祭の参加を希望されているので、実施する予定で、保津川下りでは、エコ保津川下りを体験いただき、亀岡市の環境への取り組みを学んでいただくとともに、保津川渓谷の美しさを感じていただきたいと思っている。亀岡祭では、城下町の散策や山鉾連合会にお願いをして、鉾引き体験なども今計画をしている。

同日程で姉妹都市交流を実施する市民団体、「スティルウォーター市姉妹都市委員会」のメンバー5名も来られる予定である。

行程の中で常に生徒と行動を共にされるわけではないが、大成中学校の生徒との交流や市民との交流を希望されているため計画したい。

学校教育課長

募集したホストファミリーの申込状況について、亀岡市内の中学生がいる家

庭を対象としホストファミリーを募集したところ、今日現在で22家庭から応募をいただいた。

今後、ゲスト7名を1名ずつ各家庭に受入れていただくため、7家庭を決定していく予定である。

基本的には大成中学校校区の家庭、そして、昨年度、スタディアブロードプログラム参加生徒の家庭からも応募いただいているので、それらの家庭を中心として決定していきたいと考えている。

続いて、教育プログラムについて、全行程8日間の内、ウィークデー5日間を学校内での予定にしたい。5日間で3日間を学校での交流とし、具体的には、大成中学校全校での歓迎会や部活動の体験、また授業では、英語科、家庭科、美術、音楽、国語において交流事業を行う予定で、現在、大成中学校に準備いただいている。ねらいとしては、家庭科では着物の着付け、国語科では書写、習字をしていただく予定で実践型の教科を中心に日本文化に親しんでもらおうと考えている。また、学校での最終日には送別会なども検討いただいている。

スティルウォーター市からは他の学校も行ってみたいという要望もあり、現在、姉妹校である大成中学校を中心に受入れることにはしているが、短時間にはなるが、詳徳中学校や南丹高校でのプログラムについても現在調整中である。

学校では生徒と同じような名札を着用し、学校生活を送ったり、部活ごとに作っているTシャツをプレゼントしたり、生徒間の中でよりアットホームな交流を深められるプログラムを検討中である。

市長（説明要旨）

クニッテルフェルト市へのスタディアブロードプログラムについて、亀岡市とオーストリア共和国のクニッテルフェルト市は、昭和39年に姉妹都市盟約を締結し、これまで相互に派遣するなどの交流を行ってきた。

今年度はクニッテルフェルト市制800周年、また姉妹都市盟約60周年の記念すべき年である。今年の1月23日からクニッテルフェルト市を訪問した時に、中高一貫校の校長と市長に会って受入れの依頼をしたところ、10名の子どもを受入れてくれることになった。

派遣期間は11月8日から11月17日までの10日間で、対象者は亀岡市立中学校の2、3年生10名程度で現在選考中である。

詳細については秘書課から説明をお願いします。

秘書課長

クニッテルフェルト市への派遣の方について、派遣期間は10日間で行程としては、11月8日の夜に大阪を出発し9日にグラーツ空港に到着し同市で滞在、10日から15日までクニッテルフェルト市に滞在・交流し、16日にウィ

ーンを経由して亀岡市へ戻る計画である。

対象者は亀岡市立中学校の2、3年生10名程度としており、各学校を通じて募集要項を生徒のタブレット端末に配信し参加者を募ったところ60名から応募いただいた。

現地でのサポートについては、10名の他に随行者3名と現地通訳2名をお願いしており、随行者のうち1名は教育関係者に行っていただく計画をしており、この教育関係者については、令和7年度以降クニッテルフェルト市の中学生が亀岡市を訪問されることとなった場合、受入れ可能な中学校からできれば選出いただきたい。

クニッテルフェルト市での滞在先は基本的にはホームステイで向こうの担当の方と調整している。

交流校はBG/BRG クニッテルフェルトで、ここの学校については高等教育への進学準備を行う学校で日本の中高一貫教育校のような教育機関になっており、ここに受入れをしていただき、授業体験やクラブ活動、生徒との交流を行う予定である。

現地での事業計画として、ホームステイ、学校滞在・交流、クニッテルフェルト市内の視察、ウィーン市内の見学、グラーツ市内の見学などを企画している。

今年1月、クニッテルフェルト市の市制800周年ということで、市長と菱田議長がクニッテルフェルト市を訪問し、その際ウィーンの在オーストリア日本国大使館を訪問しスタディアブロードプログラムの話も大使に聞いていただいた。大使から「ぜひ、未来ある中学生に外交の現場を見ていただきたい。」と大変ありがたい申し出をちょうだいしたので、ウィーンでは大使館を視察していただく方向で調整をしている。

参加者の選考については、第1次選考は志望動機などの作文審査、第2次選考は、市長と神先教育長による集団面接により決定したいと思っており、全応募者60名中25名が1次選考を通過し、6月23日に集団面接を実施し上位10名を派遣生徒として決定する予定である。

今回については学校ごとの選抜は行わないで、上位10名を決めたい。

今後のスケジュールとして、より充実したプログラムとなるように、事前研修を3回行う計画であり、英語、ドイツ語のレッスンや、オーストリアの歴史・文化紹介、それと亀岡市の生徒に亀岡市の紹介をしていただく方法などについて学ぶ機会を計画している。

事業終了後には報告会を開催する他、各学校においても、成果発表を行っていく予定をしている。また参加者から提出していただくレポートをまとめて研修通信として、全中学生の個人タブレットの端末に配信をし、すべての生徒にクニッテルフェルト市での体験、交流について知っていただくようにしたいと考えている。

生徒の安全確保に万全を期するために、生徒が滞在するホストファミリーについては、クニッテルフェルト市の担当者と学校が連携の上、選考していただくよう調整をしている。

また、亀岡市で海外旅行保険に加入し、オーストリア滞在中は全員に1台ずつポケットWi-Fiを貸し出し、すべての生徒とすぐ連絡がとれるよう体制を整えたい。

市長

今年度の受入れと派遣についてはこのような形で進めていきたい。

スタディアブロードプログラムについて、教育委員の皆様がどのようにお考えになっているのか御意見をいただきたい。

委員

私は35年前の大成中学校3年生で、その時にいただいた写真の同級生のことが頭に浮かんだ。

長い間、文通とかしておらず、せっかくの機会をもったいないことをした。

続けていたらもっと英語ができたかなと思う。

当時のことを思い出しよかったと思えるだけでも、素晴らしい機会をいただいたと感じている。

当時、現場の先生が一人ひとりマッチングをしていたと思うが、大変な労力でやっていたことが、今になって少しわかったように感じる。

市長

その時は向こうから来られたのか。

委員

来られていない。

今回、選考の基準や研修内容がおそらく指定されているので、海外と関わりたいとの思いを持った意欲的な生徒が自分で自己プレゼンをされて行っていると感じている。

また、たくさんのプログラムが入っており、亀岡市を存分に味わってもらうことができ素晴らしい。

亀岡市から外れるが、海外で人気のある任天堂が京都市にあり、任天堂のレガシー、世界の大企業に成り立っていった経緯等は、夢見る子供たちにとって何か楽しかったりするのかなとも思う。

最終的には海外との交流や文化は多文化共生であり、『多文化共生ができる亀岡市』になればよい。

亀岡市の観光資源や自然がいつまでも人々の記憶に残っていくような形で世界の人が繋がっていけば嬉しい。

市長

1 次選考について説明をお願いします。

秘書課長

各生徒から志望動機に基づく作文を原稿用紙 2 枚程度、800 字程度でいただき、市長公室側と教育委員会側でそれぞれ 3 名ずつ、基準に基づいて点数で評価し合計点で上位から順位をつけて 25 名を選んでいる。

全 60 名分の作文をそれぞれ各試験官が全部読み、それぞれの試験官がそれぞれの 60 名に点数をつけて 6 名分を合計した点数の上位から 25 名を選抜している。

市長

6 名の試験官がいて 1 名ずつ 60 名を見ており点数制で選抜している。

面接は集団面接で大体 1 チーム 4 名で、教育長と私で質問をして最終点数制になると思うが選考させていただく予定である。

それと任天堂の話だが、任天堂のプログラマーの中で今亀岡在住の人が 1 人いるので、一度、スティルウォーター市が関心があるということであれば、プログラムに含めるのも 1 つである。

問題はプログラムが詰まっているので、フリーの時間も必要かと思うため今後調整したい。

委員

私は高校生対象で経験してきたことになるが、ほぼ毎年、海外引率や留学生の受入れをしており、国も多種多様な生徒を相手に力戦奮闘していた。

大変ではあるが、受入れ側もモチベーションが高くないと駄目だとすごく思う。いろいろなことを想定していたら敷居がどんどん高くなってしまいが、自分も楽しみたい、生徒と一緒にいろいろなことを考えたいというようなモチベーションを持ちながら挑むと充実した日が送れる。

中学生はいろいろなことを吸収する時期であり、特にネイティブの英語に触れられ、耳から生きた英語が聞こえるというのは本当に貴重で、生徒にとっては上達の一途であるとともに、異文化に触れる経験は視野や価値観を広げるきっかけになる。

引率する先生方や受入れる学校の先生方も価値観の高まりや視野が広がり、自然と自発的コミュニケーションの向上に繋がっていけばよい。

中学生は将来の進路選択の幅が広まり、海外への興味関心を持つきっかけにもなると思う。

中学生はあらゆることが吸収できる年齢なので、私は英語もしゃべれなくて、生徒と戯れて楽しんでいる一方で、自分の中でもっと英語を勉強しといたらよかったと感じている。

年齢的に60歳を超えている方だと、受験に大切な英語を覚えるという感じでほとんどカタカナみたいな英語しか知らないが、現在の子どもは耳から英語が入ってきているので受入れも行く方もモチベーションを持ちながら交流できたらいいと思う。

学校の規模にもよるが、生徒7名と引率の先生が来て一部の生徒だけでやっているような取組みだと全く浸透しない。

私の勤務校は、1,200名ぐらいの生徒がいたので、ほとんど何をしているかわからない感じで過ぎ去ったこともあったので、お願いになるが学校全体で取組みができるような状況であって欲しい。

レセプションがあったりするが、せっかく来ていただいたり、またせっかく行くのであれば、何か印象に残るだけでなく、お互い良好な関係を築くきっかけづくりができればすごくよいと思う。

家庭科が対象になっているが、私も毎年和装着付けを行っており、大変受けると思う。食に関しては京都にこだわり、意外と肉じゃがが受けた。また、ハードタイプの八つ橋を作ったりもした。しかし、料理より和装着付けの方が印象深いようだ。

ただ和装着付けは、アメリカの方に関してはキングサイズが必要である。

音楽に関しては和楽器、あと日本古来の遊びが人気である。英語で説明できるようにし、遊びながら英語を学ぶという形で、遊びを通じることで言葉の壁が外れ積極的にコミュニケーションが取れる。絶対に有効なので少しの休み時間でも日本古来の遊びをしてもよい。

それと、任天堂は大変興味関心があり、ニンテンドーミュージアムはたぶん今年の秋に開館だと思う。

他アニメに大変興味を持っており、例えば「清水寺」は世界遺産と普通に紹介するのではなく、アニメの聖地として観光地を紹介する方がよく知っているのかわかりやすい。

亀岡だと秋本治さんのファインダーで、文化資料館や他にも亀岡市が紹介されているので、漫画を取り入れて観光地を見るプレゼンができればよい。

行く方も、受入れる側もよかったと思える体験ができるよう敷居を高く持たず、自分たちのモチベーションが上がるよいきっかけだと思ってもらえることを期待している。

市長

今回、大成中学校が受入れ校になるため、大成中学校全体でしっかり交流ができるような取組みを進めて欲しい。

教育長

昨年、スティルウォーター市に行かせていただき本当に学校全体で迎えていただいたことは、姉妹都市の関係35年という歴史が物語っている。

多文化ということでコミュニケーションの部分についても温かく迎え入れていただいたことは大変インパクトがあり子どもたちも感動していた。

大成中学校についても受入れの体制をしっかりと整え、「来てよかった。また来たい。」と感じてもらえる体制を整えていきたい。

市長

去年行った子どもたちとの関わりは。

大成中学校は全体で関わるが、その他の学校はどのように関わる予定なのか、何かあれば教育委員会から説明をお願いする。

学校教育課長

昨年行ってくれた子ども達については中学校を卒業している子ども達もいるため交流は難しいが、ホストファミリーになりたいというお申し出をいただいていることからホストファミリーとして交流をしたり、大成中学校の中でのプログラムではないがレセプションにお呼びして交流を深めようと思う。

補足として、1つのクラスにずっといて関わりを深めてもらうのと大成中学校の多くの子ども達と交流を深めてもらうのと、どちらを取ろうかと考えた結果、多くの生徒と交流を深めていただくことにした。

日替わりで2年のクラスや1年のクラスに入り、放課後はいろいろな部活動の交流で全体の生徒と交流を深めることで、結果的に大成中学校の全生徒とはならないが、多くの子ども達と関わりを深めていけるようなプログラムを今考えている。

委員

非常にすばらしい取組みだと評価している。

この多感な時期にこのような体験ができるのは本当に羨ましく、去年、スティルウォーター市に行かれた子ども達の報告を聞いて非常にまぶしく感じた。

人数が限られてしまうのは致し方ないが、このような経験をされる子ども達の中から、将来、亀岡市や国、世界に貢献できるような子どもが必ず出てくるのではないかという期待を持っている。

今年の亀岡光秀まつりの熙子役をされた女性はスタディアブロードプログラムに参加した方で、その方は「人生が変わった」というようなことを言われている。

今後もこの取組みを続けていくことで、このような方がどんどん出てきてくれることを期待している。

今はインターネットがあり、海外の方々もたくさんいらっしゃるのに、ネイティブな発音に対して昔に比べてハードルも非常に下がっているが、現地に行つて肌で体験することは非常に貴重である。

私の長男が短期留学したが、2週間だけでも全然変わって帰ってきたのでぜひともこの取組みはずっと継続していただきたい。

受入れについては大成中学校を中心ということで、私は大成中学校校区ではないので、大成中学校の子ども達が大変羨ましく感じる。歴史的な経緯もあるため、ぜひとも大成中学校の生徒達にはいい経験をし交流を図っていただきたい。

今回、受入行程の中で、亀岡祭のプログラムを入れていただいたのは非常によい。私は旧町外の出身だが、うちの子は旧町の出身なので小学校1年生からお囃子をしており伝統あるお祭りなので、ぜひ日本ならではの雰囲気を経験してもらいたいのと機会があればぜひ交流を図りたい。

プログラムの中にある嵐山や太秦映画村は亀岡市外になるので本当は亀岡市内で全部できたらもっとよいと思うが、地理的にもすぐに京都に行けるのもよい点だと思うのでいろいろと体験していただきたい。

保護者の1人として思うのは、派遣時期が11月ということで家庭によっては中学校3年生で11月といえば受験の追い込み時期になるため、行きたいが少し難しいというような家庭もあるのではないかな。

準備の関係等でなかなか春や夏には難しいかもしれないが、11月に10日間空けて、準備も含めると相当これに力を入れないといけないため、手を挙げたくても挙げられない生徒もいるのではないかな。

ただ大変素晴らしい事業だと思っているので、ぜひとも今後とも続けてほしい。

市長

11月になった理由は、受入れ側から「新年度が9月のため、少し落ち着いてから来ていただきたい。」とのことで、新年度になって入学やクラス替えがあり、まだ慣れてないのに受入れるのが難しいという理由である。

今回2、3年生の生徒を対象にしているが、3年生の応募がどの程度あったのかわかっていないが、前は58名の応募があり、今回は60名であるが、今回の内訳については。

学校教育課長

クニッテルフェルトに応募いただいた60名の内訳は、3年生が男女を合わせて18名、2年生が42名。

市長

受験が影響しているかもしれないが、大変難しく、2年生だけの募集でよいかという3年生が今年対象にならないのは残念だという御意見はあると思っている。

2、3年生としているが、今後考えたい。

委員

このような計画、企画は本当に素晴らしい。

ホストファミリーの募集に関しては、大成中学校地域だけに限らず、亀岡市をあげて募集をされており、またホストファミリーの受入れだけでなく、亀岡市も補助をしており大変応募もしやすいと感じた。

ホスト校が変わった際には募集したい。

手を挙げたくても手を挙げられない理由の1つに英語力があるかと思う。

今、亀岡市では2年生から英検の補助をされているが、手を挙げる子ども達は中学2年生になるまでに、英語面接もある3級や準2級などを取っている場合もあるので、今後、英検の補助を中学1年生からとすると、意識も高まり手を挙げやすい流れができるのではないかと思う。

市長

英検の補助の件もあるが、1年生を対象にするのはどうなのか。

スタディアブロードプログラムがきっかけで、英語を勉強しようというやる気スイッチが入ることもあるのかもしれない。

委員

スタディアブロードプログラムは本当によい取り組みである。

グローバルな社会を生きていくことを考えると、このようなプログラムによって国際的な感覚が培われることはすごく得難いことであり、外国の文化を知することは自国の文化や自分自身を知ることであるため、ぜひこの事業は続けていただきたい。

昨年度のスティルウォーター市に行った子ども達の報告会に参加をさせていただき、行って気がついたこと、発見したことを生徒が大変生き生きと語っていたが、各学校での発表会后、報告集としてまとめ、すべての生徒達に送信をされておりフォローもしっかりとできていると感じた。

今年であれば、行った子ども達が行かない学校に行って直接話をして伝えたり、或いは、国際理解教育ではないが小学校も英語が教科として入っているので、行った子ども達が校区の小学校に行って経験を伝えたりするとさらに幅が広がるのではないかな。

受入れの計画については、本当によく考えられており、龍安寺へ行くならお茶や座禅の体験、また金閣寺を見てもよいし、ぜひこのプログラムが成功するようにお願いする。

市長

去年、行った子ども達が地域の学校でどのような活動をしたのか。

学校教育課長

昨年度、各学校選抜で行く子を選んだ理由の1つに、各学校に活動を伝えていきたいという思いがあり各学校選抜にした。

各校様々で規模も違うためまとめた報告書は今手元にはないが、各学校それぞれ発表をして欲しいという思いを伝え各学校で取組みを実施していただいた。

市長

今年、クニッテルフェルトから帰ってきたら、何か取組みはするのか。

学校教育課長

学校ごとに市内のすべての学校の生徒にこの取組みの効果をつなげていきたいので、今後、選抜する中で、各学校からゼロとなった場合は、その学校にこの取組みをどのようにつなげていくのかは1つ課題にさせていただきたい。

委員

市の予算を使った公教育なので、各学校で全生徒に広げるという考えもあるが、私自身は全然違う考えを持っており生徒が取組みを聞いていいな、楽しそうだなと感じると思うが、このプログラムはやはり体験しないと効果はないと感じている。

一部の生徒の体験でよくて、ずっと続ける中で将来亀岡や世界に貢献できる人間が1人でも2人でも出てくれば、この事業は大成功で取組みを広げるのはよいが、この体験は行った生徒個人のもので体験を共有するのは正直非常に難しいのではないかな。

各中学校から1人だと、中学校によっては2人の中から1人選ばないといけないようなことが起こるので、そうではなく、たまたま選ばれた生徒個人のものになってもいいという考えのもとで続けていただきたい。

市長

今年は手を挙げられなかったけど、行った子どもの取組みを聞いて次回は手を挙げたいと思う子どももいるだろう。

この取組みを継続していきたい。

来年の行き先については何も決めていないが、継続していくことが大事であり子ども達がチャレンジして作文を書くだけでも、効果が大きいと思っているため各学校に行く必要はないかもしれないが、申し込んだけど行けなかった子ども達や行ってみたいけどチャレンジできなかった子ども達が話を聞ける場を作らないといけない。

教育長

子ども達と一緒にいて感じたことは、まず中学生なので安全面、体調面は大変気を遣うところでホームステイした場合に何か起きた時の対応のことを考えると2、3年生がよく、さらには今のスタディアブロードプログラムは平等だと思っている。

体験することは本当に素晴らしく、体験するとオクラホマ州大学に行きたいと宣言する子や通訳になりたいなど子ども達の気持ちが完全に変わってきていることがわかる。

それから、各学校から1名を選ぶとなると上位でない子ども達を選ばないといけない可能性もあることから、2、3年生に絞って上位10名、15名という形で今回選考基準を変えさせていただいた。

オンラインも使えることから今後は代表で何か話す場をもち、オンラインで小学校へ伝えて話を聞かせることなどができると思うため幅広く臨機応変な状況で対応していきたい。

委員

自己負担なしで中学生が海外に行かせてもらえるのは、多分事例がほぼなく全国的にも稀有なプロジェクトであり、教育委員会にいるものとして本当に感謝したい。

前仲山副市長が留学されたときの話を過去に一度していただいたことがあったが、大学時代に海外に行くのと高校時代に行くのとでは随分意味合いが違い、今回は中学生なのでさらに意味合いが違い大変貴重な経験になるだろう。そういう意味ではずっと継続できれば嬉しい。

今日の総合教育会議のテーマとして、「スタディアブロードプログラムに係る市内学校での受け入れについて」とあるが、総合教育会議でそれをどのように扱うのかと少し戸惑いがあったが、各委員や市長のお話を聞いてスタディアブロードプログラムをどのようにとらえていくのかを議論することは、総合教育会

議の中で議論するに相応しいと感じた。

昨年度、国が策定した「教育振興基本計画」には2つのコンセプトがあり、1つは「持続可能な社会の創り手の育成」、もう1つはいろいろな子どもがいる中で「それぞれの子どもがウェルビーイングを実感できる教育の実現」である。

このプログラム自体が、自分達の社会とは違い、違う文化、或いは違う考え方を知ること、すごく多感な中学生がこのような刺激を受けることが多分持続可能な社会の創り手になることにつながっていくのだと思う。自分以外の考え方をしっかりと自分が受入れていくことは大変貴重な経験である。

あと全体的にスケジュールがかなりタイトなので、特にアメリカ、ヨーロッパの場合は時差の問題もあり道中もかなり時間がかかり、夜のフライトの場合もあるので、可能であれば2週間ぐらいの期間が取ればよい。

例えば2週間だとすると、現地で10日間過ごした内容について自分が感じたこと、学んだことを現地の人達に対してプレゼンするようなこともできるように思う。

市長

向こうで何ができるかとスケジュールの内容については、今後少し検討してもらいたいのと今後どう続けていけるかということも考えていかななくてはならなくて、円安の今は海外旅行費用が大変高いため今後も100万近くはかかるだろう。

今後は姉妹都市を有効活用していくことも大変大事である。

今年、台湾から亀岡市と交流したいという話がいくつかあることから、台湾に行き市長等を訪問しながら次の場所を考えていきたい。

その他に夏にブラジルから柔道留学で2週間、2名の女子大学生と監督1名が来られ亀岡を拠点に龍谷大学の柔道部と交流をされる。

それと併せて、亀岡駅北にキャンパスゲートという国際・就労文化教育施設ができ、先日はタイの女子学生が10名ほど来られ亀岡高校と交流をした。

同校には、アジアやアメリカから学生が来られ、今度アメリカから大学生が来られるので市内の小中学校との交流もできるよう進めていきたい。

今後、キャンパスゲートと亀岡市と教育委員会とで協定を結んで国際交流ができるよう、海外から来られたときには亀岡市内の小中学校に来ていただき、子ども達と交流する場を作っていきたい。

(2) 食育について (資料2)

教育長 (説明要旨)

学校生活の中において、児童生徒の健康や発育に直接かかわることは当然と

して、将来にわたって記憶や思い出づくりにも大いに影響がある「学校給食」にあたっての食育という観点で御意見をお伺いしたい。

学校給食におけるフローについて、令和５年度に給食検討懇話会の提言を受け、教育委員会で安定・安全・正しい食習慣を身につける地域特性を活かす中学校給食の早期実現などのキーワードを大切に基本方針を定めた。

令和６年度はその具現化を視野に入れ、現在、専門のコンサルタント業者による実施方針決定にあたるための根拠資料を基本計画の名のもと策定を進めており今年度末には方向性を確定する。

そして、来年度以降は実際に整備を開始し、令和１０年からの中学校給食と現センター老朽対策を実施するとともに、今後よりよい給食提供を目指していきたい。

本日は、これらのことも踏まえ給食に期待すること、給食が担う食育とは、また、オーガニックや地産地消を視点とした給食とは、などをはじめ、給食提供実施における最適な運営手法など、幅広くアイデア出しといった観点から御意見をいただきたい。

市長

中学校給食を令和１０年から実施することを明言しているが、それに先立って育親学園では令和８年から自校給食でオーガニック給食を進めていく予定である。

今後、給食をどのように進めていくかについては、給食はただ単に食事を取るだけではなく食育という観点を含めて考えていく必要があり、特に生まれてから死ぬまで必ず食事を取らないといけない、それが正に体のもととなっていることを含めて食育について皆さんの御意見をいただきたい。

委員

今、日本においての食育は農水省が中心となって言われている。国の安全面から、いろいろなところに過度に食料依存している状況も何とかしなくてはダメで、そのためには農業で経済的に食べられるようにすること、すなわち消費を増やすことが求められている。

そのためには、国産の安全なものがやはり大事だという考え方から、食育の大切さということが言われ始めてきたのではないかな。

一方で食育はすごく大事であると同時に、例えば学校給食だけで食育が完結するかという考え方がある。

家族の食に対する考え方に対して何ができるかという意味では、例えば、食育に意識を持った給食のあり方がプラットフォームになっていき、家庭でよりちゃんとしたものを食べようという意識に繋がるのがすごく大事であると思う。

最後にもう一つすごく大事なことは、委員会において何を優先させて考えていくのかということで、教育課題は多種多様であり、すべてを同じ力量で解決していくことはまず不可能だと感じる。確かに食育そのものはすごく大事ではあるが、これが最優先されるのかどうかの議論がもっと必要である。

委員

「食育」について「育」とつく、教育委員会の仕事かなという印象はあるが、食育基本法が農水省の管轄であることの意義は、やはり食に関わることは学校や教育だけの課題ではなく産業的な部分も含んだ概念があると思う。

今、亀岡市ではオーガニック野菜を育て、それを給食に乗せて循環させていくことは子ども達の健康が第一にある一方で、農業従事者の生活の安定がリンクして、産業や地場産業として位置づき発展していく大きな取組みであり、今の方向性を大事にしながら進めていく必要がある。

そのためには、やはりセンターで安定的に供給できることが大事で、業者が入って、『供給をする、経営が成り立たなくなる、辞めさせてもらう』ということになるのが一番大変なことであり、現実には京都でも、農芸高校のように業者が食事を提供できないようなことがあったわけで、このようなことは絶対に避けなければいけない。

それであれば、方法としてはやはりセンター方式がよい。

提言等の中でいくつか方向性を示していただいているが、京都市も今中学校給食を進めており、一括、全部センター方式で賄うことにしていたが、無理で一部業者に作って供給してもらうような形になっていると新聞やニュースで報道されていたが、そこにはすごい不安定さを感じる。

まずは安定的に供給できること、それから地場産業の育成にも繋がり子ども達の健康・安全に繋がっていくこと、そして大事なのが給食に使われている食材についての説明や指導、食の安全について学ぶ機会を提供すること。

例えば、給食のときに食材についての説明を放送で流す、栄養教諭が巡回して給食の指導をする、その基本として各学校には健康安全教育の中に給食、食育の計画を設けて計画的にやっているが、もっと直接的に農家が学校に来て教えてくれる、生産者と子ども達がフェイス to フェイスで食の安全について学ぶこともできるのではないかな。

中学校給食の実施を契機として学校給食が安定して安全に提供できるようになればよい。

市長

今、指定管理者のような形で民間委託をしている中で気になる点があり、食の安全・安心となったときに、民間は効率性とコスト削減を重視することから、セ

ンター方式、自校給食問わず、市の外郭団体として法人化をして市の一部として取り組んでいくことが必要ではないかと考えている。

食の安全・安心、地場産品をより一層活用していくこと、それとオーガニックで農水の施策もうまく捉える中で、1つは農業者を育てていきながらよりよい野菜や米が子ども達の給食に提供される関係性にするためには、安全・安心で持続可能でしっかりと責任が持てる体制を作らないといけない。

今後、令和10年に向けて進めていくにあたり、組織のあり方も少し考えていかななくてはならない。

委員

保護者の立場として、子育てが忙しかったときは、食育が大切と思ってはいても、時間と心のゆとりを優先し、時短で手軽にすぐ食卓に出せるもの、子どもたちが好んで食べてくれるものを出していた。

今、中学校においても中学校給食について話し合いが進められているが、入部する部活動によっても、体づくり、体力づくりを意識して食べることが大切で、スポーツをする場合には、的確に摂取するとよい栄養素もある。

体にいいもの、添加物の少ないものだと、やはり地産地消や新鮮な野菜であって素材を活かしたお料理なら、薄味でも十分おいしさを感じられる。

食育においては学校と各ご家庭においても共通意識で取り組めるよう連携していけたらよい。

市長

今、給食の役割が大変大きくなっており、こども食堂などいろいろあるが格差社会の中で、毎日の食事がまともにとれない子ども達も家庭によってはあると聞いている。

給食が生命線みたいな話も一部ではあり、生まれてから死ぬまで食べていけないといけないわけで、食べ物の質、食べるもの自体によりその人の体調やその後の人生、次の世代に影響を及ぼしていくものであり、昨今、給食でもアレルギーの子ども達が多いことからアレルギー対策の話も出ている。

科学的に立証はされていないためはっきりと言うことはできないが、食の課題から添加物が結果的にアレルギーや子ども達の体調に影響を及ぼしているのではないかとされている。

だからこそ、食を含めて安全で安心で子ども達の舌が敏感なうちにしっかりとした本物の食材を活用することが大事であることから、給食の現場で少しでも実現できるとよい。

保護者の方々は忙しいため時短も大事であるが、公教育の中で給食の意義をしっかりと捉えていく時代になったと感じている。

委員

食育は単に栄養や健康ということだけではなく、地産地消、食文化というところまでをターゲットにしていると思う。

昨年、亀岡市はオーガニックビレッジ宣言をされ、京野菜の産地であり京野菜に触れたり食することで単に食事ということだけでなく、この地域を子ども達が愛するということにつながっていくのではないかな。

少し話は変わるが、今回の総合教育会議のテーマの「スタディアブロードプログラム」と「食育」、全然違うテーマのようで実は通底しているところがあるのではないかな。

市長が同じ青年会議所の出身であり、私が現役時代に市長に「愛郷心」というテーマで一度インタビューをしたことがあり、その時に「市長にとって愛郷心とはどう考えておられますか」と尋ねたときに、「愛郷心とは、子ども達が外に出て困難にぶつかったときに乗り越える力がある」というお話をされ、非常に胸に落ちた。

そのような考え方があり、子ども達にシンプルに地元を愛するだけでなく、外に出てこれから活躍するためにも自分のことを知って自分を愛したうえで他人を愛することができるのではないかな。

食育を各亀岡の各地域で進めていければよい。

テーマに関係はないが、教育委員に就任して2年になるが、教育の現場にどこまで貢献できているのだろうかといつも考えている。

今のところはあまり貢献できていないと感じており、教育委員会制度は地域住民の声を教育に反映させるわけであるが、7人の中で、教育の専門家ではないのは私と出藏委員の二人で、他の委員は幼稚園や私学など、それぞれ経験されている中で、専門家でない私と出藏委員は、地域住民の代表だと思って活動しているが、教育現場に貢献するためにはどうしたらいいのか日々考えている。

市長

教育委員会制度の中で秋山委員は保護者代表、出藏委員は市民代表、あと専門性を持って経験をしている方、多様な教育委員会の人材をもって初めて多様な子どもたちの課題に対応できる。

直接的に言ったことが形になったことはないかもしれないが、スタディアブロードプログラムもダメなら制度を見直すが、今日はよいとの御意見いただいたので継続できていると思っている。

教育委員会で具体的な事例の課題を話し合う機会はあるとあって当然であり、総合教育会議で御意見をいただき、方向性が間違っていれば見直し、方向性が良ければどのように発展させていくのかを考えていかなければならない。

保護者の目線、市民の目線、日頃から子どもに接して感じていることを直接聞

かせていただけることは大変ありがたいことなので、引き続きよろしくお願いします。

食育については、亀岡にはお祭りの時に決まったものを食べる習慣があり、食と文化のつながりを子ども達に体験させてあげたい。

給食はお腹をいっぱいにする役割だけでなく、背景にある歴史や自然から生まれてくる農産物の魅力など、いろいろと知るためにももう少し時間を取る必要がある。

栄養教諭が各クラスを回って今日の食材の説明をしたり一緒にお米を作る体験や野菜の収穫体験など、全てが食育に関わることでそれが生きる力につながっていく。

委員

食育は本当に難しい内容で、対象者が高校生だとそれまでの15年以上の食生活が影響しており、好きなものを好きなだけ食べたり家庭によっては朝食を食べる習慣がなかったりしている。栄養バランスや正しい食事について説明をしてもなかなか浸透しない。

離乳食から好き嫌いが始まり親の食べ方が子どもに反映される。また食に対する情報がすごく多く、テレビではほとんど食べ物のことを放送しており、子ども達は画像を通じて正確に理解することなく好きな物を購入して好きなだけ食べている。高校生の4割はすでに生活習慣病まっしぐらというようなデータも出ている。

どこまで食育が浸透できるかとなったときに、「鉄は熱いうちに打て」ではないが、生まれて離乳食のときから親に食育の知識がなかったら育成はできないとすごく感じた。

様々なライフスタイルにより、正しいことを言っても「それでないとダメなのか」という意見が飛び交ったり、毎年、統計を取っている中で、朝食を食べないのは実は少なく、ほとんどの生徒が朝食を食べていると答える。

しかし、食べている内容の中に、青汁、サプリメント、30秒チャージを飲んでいるなどで、それが朝食だと答えている生徒もいる。食べている場所を聞くと歩きながらという答えもある。

このような状態の子ども達がいる中でどのようなアプローチで食育を進めたらいいのかが常に課題であった。食は五感教育であり、食品会社が実施している味覚テストを生徒にすると、味がわからないと言う生徒もいる。添加物の摂りすぎによる亜鉛不足の人が増えてきているためである。

給食で栄養を摂っている人が大変多いと思うが、給食は専門家によりバランスよく考えられており、給食を通じて栄養を理解することは本当に大きな役割であるとともに子ども達に食育が浸透できる行為である。

また、家庭では毎日の食事を通して行事食や郷土食などを学ぶことがほとんどなくなっており、給食で実践できる食育でもある。給食を通じて知識を注入することができることから、子ども達にとっては給食は本当に大きな役割である。

「食」という漢字は人を良くすると書くが、人を悪くしている状態であるため、給食を通じて立て直し、軌道修正できる基礎がないと後々生活習慣病とお付き合いする子ども達が増えていくことになる。

オーガニックについては、コストが問題で、電気代やガス代の高騰、自然災害、気候変動によって大きく左右されないかなど、常に安心安全な食べ物が提供できるようなシステムがあるのかが気になる。

市長

お母さんの好き嫌いが影響し、お母さんの嫌いなものは食卓には出てこないが、これを改善するのが小学校給食であるのかもしれない。

去年の秋にイタリアに18年住んでおりイタリアの食のスローフードをされている日本の方が来られ、お土産にイタリアの小学校で使用する陶器の重たい給食用のワンプレートのお皿を持ってきた。

イタリアのローマの小学校はすべて自校給食ですべてオーガニック給食で、給食の時間帯は学年ごとに分けており、作り置きしたものを出さずにレストランと同じで来た子ども達の顔を見てシェフが作って出し、今日の食材について子ども達に説明をして、なるべく心のこもった給食を出しているのでぜひとも一度イタリアのローマに見に来てくださいと言われた。

昨年、アメリカのオーガニックの巨匠でドキュメンタリー映画を作っている方が亀岡に来られた。彼女はアメリカで小学校に農場を作り、その農場で取れた野菜を給食に出したり、自分でオーガニックレストランを開いている。

このような話を聞いた時に、今、食の安全・安心や野菜などがどのようにできているのかを知らない子どもが増えており、農業体験も含めて食べ物の成り立ちを学ばせることが大事になってくる。

委員

幼稚園長で今津農家組合長でもあり、先週、田植えを終わらせた。

食育は「食育＝土」だと思っており、35年前、40年前は父と一緒に田耕をしていると「うるさい、虫が飛んでくる、やかましい。」と言われていたのが、時代が変り、息子と田耕をしていると「ここの田んぼが最後なので、大きなマンションなどを建てないで。風景がいいから。」と言われた。

食育、食べることが教育だけに押し付けられるのは酷で、「食育＝土＝農政＝環境」のように全体で見えていかないといけない。

先ほど市長がおっしゃったように子ども達が思いをこめて食物を育てる姿を想像するのは楽しく、またオーガニックで作られた物だから作る人だけでなく買う人も大切にすると食べる人も大事に食べる。

よく言われるのが、作った現場を見せたくないだけでなく、物事がうまくいかなかったときのことも見せてあげられるし、その不安定さを楽しむ力をこれから幼少期にどのようにして育てるかだと思ひ、そのようなことも食育につながっていく。

伊賀のあたりで農業をされている方は博士課程を持たれている方が結構いて、極めていていると思ひていてもまだまだ先があるとおっしゃっており、結局オーガニックをすることは持続可能な社会であり、不安定さの中でも知恵を出し合いながら農業をされているがその根底には食育がある。

教育現場、学校の先生はおそらくそのようなことを伝えたいと思われているのではないか。

農家の人手不足が加速し、農家も20年後には100万人が20万人になる予測で危機迫っている状態であることから、給食センターについては市長と同じで民間委託でない方式が良い。

農芸高校で食事の提供が止まったときに先生方が電気釜を持ってこられたときの風景を考えると、どこまで教育界が担わないといけないのか、現場にいて理不尽さを感じることもある。

市長

食育は、これからの教育の中でも大変大事で、農とどのようにつながっていくのかを子ども達にも理解してもらうことも必要で、その環境も大変大事である。

先日、全国 of 林学の先生達と育親学園の学校づくりについて議論をした中で、給食に使う食器はプラスチックではなく木の器にしてほしいと言われた。

イタリアでは大きな重たい陶器のお皿を使用しており、まさに本物で本物を食べていくことが大事であることから木の器にすることも食育の一つかと思ひ。

食育については、今のデリバリー給食の在り方も含め、いろいろ問いかけながら、子どもたちが健康で亀岡をふるさととして育っていく、そういうバックボーンづくりをしっかりとしていきたいのでよろしくお願ひする。

4 教育長あいさつ

5 閉会